凛としていきる

理系女性の挑戦

異分野融合で人間科学研究

″何屋さん″問い続ける

人間の視知覚が主観的であることに興味を持ち、心理学を専攻した。主観的世界と物理世界の知覚のずれは日常生活でも頻繁に起きていることに気づかされた。視知覚をもっと知りたくなり大学院へ進学、分野横断型の研究事業に関わる機会を得た。

異分野融合に関わるのは尻込みする時代だったが、指導教員の「理解しようと努める謙虚な姿勢があれば、新しい世界でも大丈夫」という言葉が私の背中を押してくれた。異分野融合事業の所属先は東京大学の情報理工学系の研究室。同じ知覚現象でも分野が異なれば扱い方も異なる。研究の成果を社会に還元する意識を学んだ。

その後、異分野とのコミュニケーションと社会への還元は、私の活動の裏テーマとなった。研究に向かう時、出会った恩師たちの言葉を思い出す。

「専門性を深めるのも大事だが、他分野と互いに手をつなぐようにしないとね」と、異分野を理解する努力の必要性を教えてくれたのは最初の上司である原島博先生（現東京大学名誉教授）。異分野の人に端的に自分の専門性を説明できるように「君は何屋さん？」と問いかけ続けてくれた二人目の上司。

錯視ブロックワークショップ

他にも多くの恩師から異分野とのコミュニケーションの大切さ、姿勢を学んできた。その教えがあったからこそ、文系の私が工学系や芸術系の領域に臆することなく飛び込んでいけたと思っている。

現在私は「発見の喜びや異分野とのコミュニケーションの楽しさを伝える」ワークショップ（WS）を研究に取り入れている。例えば、錯視ブロックWSでは、何度も観察することの大切さを自然に学ぶ。この錯視ブロックは今夏、静岡科学館る・く・る（静岡市駿河区）で展示が決まった。院生や社会人向けには、科学技術戦隊WSも好評だ。異なる専門家同士を科学技術戦隊の隊員に見立て、課題に向かって身体を動かしながら共同作業を行う。

東京大学で出会った女性研究者7人で構成するエンジニアリングサロン「CHORDxxCODE」（コード・コード）の活動では、研究の社会還元を志している。

いずれの活動も異なる専門家同士で取り組んでいる。今後も「何屋さんであるか」を問い続けながら挑戦していきたい。

企画協力・日本女性技術者フォーラム（JWEF）

（火曜日に掲載）

東京芸術大学芸術情報センター助教
大谷（おおたに） 智子（ともこ）

〈プロフィル〉04年（平16）聖心女子大院博士後期課程満期退学、博士（心理学）。東大院情報学環、東大IML、東北大電気通信研究所を経て15年より現職。

無断転載・複写禁止©㈱日刊工業新聞社